

資料編

第1章 丹波篠山市のあらまし

1. 位置

兵庫県の中東部に位置する本市は、大阪府（豊能郡能勢町）と京都府（南丹市）と接し、総面積は377.59k㎡です。

市境から40～50km圏内には、神戸、大阪、京都などの都市地域があり、鉄道ではJR福知山線（宝塚線）の複線電化による時間の短縮、自動車では阪神高速北神戸線、舞鶴若狭自動車道、京都縦貫自動車道の整備により、これら都市地域へのアクセスは1時間圏域となりました。

2. 自然

丹波篠山市は、周囲を、三嶽を最高峰とする多紀連山など400～800m級の山並みに囲まれた盆地状の形状をしています。この地は太古の昔、湖水であり、島状の丘陵地と盆地周辺の丘陵部には、1億年以上昔の地層である篠山層群が分布しています。盆地の中央部を加古川の上流部である篠山川が西流して瀬戸内海へ至るとともに、武庫川や日本海へ注ぐ由良川の源流があります。気候は、年較差、日較差ともに大きい内陸性気候が特徴です。

総面積の4分の3を森林が占めていますが、原生林などの自然植生やスギ、ヒノキなどの植林地植生も比較的少なく、大部分は人間の活動によって置き換えられた代償植生となっています。集落や人里に接し、人間の暮らしに大きく関わってきた「里山」では、多様な動植物が見られるとともに、集落周辺に広がる水田などの農地とあわせて、日本の原風景ともいわれる馴染み深い農村風景を醸し出しています。

3. 歴史

丹波篠山地方の歴史は古く、旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である板井・寺ヶ谷遺跡や、県内第2位の規模を誇る雲部車塚古墳などからうかがえます。

大化の改新後、律令国家の支配が各地方に及び、この地方でも多紀郡衙が設置され、天引峠から氷上（現丹波市）に抜ける山陰道の小野、長柄に2駅が置かれました。また、平安時代を迎える頃には、東寺領大山荘をはじめ、多くの荘園が開かれました。

中世の終わりには、波多野氏が八上城を拠点に丹波一帯を勢力下に置いていました。その後、徳川家康の命によって篠山城が天下普請で築城されましたが、城の築かれた丘陵地が「笹山」であったことから、以後、この地方は「笹山」と呼ばれるようになりました。篠山藩は、松平氏3家が8代、青山氏が6代にわたって藩政を執り、約260年間続きましたが、所領の中心は丹波篠山市のほぼ全域に及んでいました。

明治維新後、明治22年（1889年）に市制・町村制が施行された際、多紀郡では1町17村が成立しました（その後、1町18村）。それから、幾度の合併を経て、最終的には多紀郡4町が合併して、平成11年（1999年）4月1日に篠山市が誕生し、令和元年（2019年）5月1日、市名を現在の丹波篠山市に改称して現在に至っています。

このように、丹波篠山市は近世以降の約400年にわたって「一藩一郡一市」という全国的にも稀な歴史をもっています。また、明治以降の約150年間、戦後の一時期を除いて人口が4万人台で推移してきた点や、私鉄資本がまちの中心部まで入ってこなかったことから、大規模開発が行われなかったなどにより、昔の姿があまり損なわれずに残っているという特徴があります。

4. 景観

丹波篠山市は神戸、大阪、京都から1時間の圏内に位置しながら、緑豊かな里山と田園風景が継承され、今もなお日本の農村の原風景である「ふるさとの景観」に包まれています。また、小京都とも言われる中心市街地は、江戸期の城下町であり、河原町妻入商家群が国の重要伝統的建造物群保存地区（以下、「重伝建地区」）に指定されている歴史的な町並みの残る市街地でもあります。加えて、後年、旧宿場町などの面影が色濃く残る福住地区も重伝建地区に指定されました。福住と同様に宿場町であった古市、追入地区、丹波焼の窯元が立ち並ぶ今田町立杭地区、兵庫県一の茶の生産量を誇る茶畑の景観を有する味間奥地区など、地域特有の景観もよく継承されています。

一方、近年の大規模建築や建築物等の老朽化に伴う建替えなどにより、丹波篠山の自然・田園・歴史が調和した町並みが失われつつあります。先人たちが農業等を通して継承してきたこの地の景観は、日々の営みの積み重ねを通して形成してきたものであり、他の都市では失われた所も多いことから、その貴重さは一層増しています。

5. 文化

丹波篠山は、独自の歴史や風土を土台としながら、京文化の影響を受けてきた地方です。一方、丹波猿楽や人形芸能は、能楽や文楽の成立に大きな影響を与えるとともに、豊かな芸術文化の伝統を今に伝えています。また、日本六古窯の一つに数えられる丹波焼の起源は、平安時代末期まで遡るとされ、その作窯技法は国の無形文化財に選択されています。

この地には、歴史的な町並み、祭りや民謡などの伝統行事、特産品や伝統工芸、郷土料理など有形・無形の伝統文化が数多くあり、また、伝統に培われた匠の技が、丹波焼や丹波杜氏、建築、農業技術などに受け継がれてきました。また、丹波篠山を語るうえで、丹波黒大豆、山の芋、栗、松茸、ボタン鍋など、丹波篠山の大地の恵みである特産物とその食文化を抜きにはできません。それぞれのシーズンには丹波篠山の「食」を求めて多くの観光客が訪れるなど、「丹波篠山の農産物」として全国ブランドの地位を確立しています。

それらは人々の生活と密接な関わりを持ちながら、長い間大切に守り育てられてきました。この地に伝わる民謡デカンショ節の歌詞にも多く謡われてきたものが、さらに人から人へと受け継がれ、今なお暮らしの中に息づいているとして、平成27年（2015年）、「日本遺産」を文化庁が創設した初年度に“丹波篠山デカンショ節 一民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶”として認定されました。また、続いて平成29年（2017年）、前述の丹波焼が“きっと恋する六古窯 一日本生まれ日本育ちのやきものの産地”として他のやきもの産地とともに、日本遺産に認定されています。

また、こうした美しい景観や地域の文化資源を活かすことにより、市民の創造性を育むとともに、新しい産業やまちのにぎわいに結びつけることをめざす丹波篠山市の取り組みは、文化芸術を創造するまちとして高く評価され、ユネスコが提唱する創造都市ネットワーク（クラフト&フォークアート部門）への加盟が認められています。

第2章 第2次総合計画のふりかえり

第2次篠山市総合計画は、合併から11年が経過した平成22年度（2010年度）、次の10年を、合併後のまちづくりから自立して持続できるまちづくりへ移行する新たなステージと位置付け、その基本的な考え方とまちの将来像を示すことで、本市のまちづくりを、より発展的かつ具体的に推し進めることを目的として策定されました。ここでは、前計画で将来像や施策の大綱をどのように定め、取り組みを行ったかをふりかえります。

1. 将来像と基本方向の確認

第2次計画では、大きな課題として、財政再建（篠山再生計画－行財政改革編－）と人口減少社会への対応（篠山再生計画－まちづくり編－）があり、その他の課題も含めて、まちづくりの主な課題とそれに対する解決の糸口を次のとおり示していました。

【まちづくりの主な課題】

- (1) 人口減少と人口構造の変化への対応
- (2) 財政の再建とまちづくり
- (3) 分権型社会のさらなる進展と「新しい公共」を担う主体の広がり
- (4) 人のつながりの変化と地域づくり
- (5) 経済・雇用状況の変化とまちづくり

【課題に対する解決の糸口】

- (1) 人と人、地域と地域などの結びつきを見直す
- (2) 小さな動きを大きくし、生きがいへ
- (3) 多様な参加によるまちづくりを進める
- (4) 田園景観を保全・整備し、創造する

解決の糸口の方角を受けて、第2次総合計画の基本構想では、まちの将来像として

①これまでから丹波篠山の農村の中で育まれてきた、「人」「社会」「環境（資源）」がバランスを保ちながら活力ある社会をつくっていくという「共生の暮らし方を実践する住みよいまちづくり」を『農』という言葉であらわし、継承して、発展させる。

②地域の活性化や経済社会の維持の活動の中で培われる人々の「意識」や「営み」、「素材づくり」を通じたさまざまな情報発信や提案活動などを行うという「新たな自信と活気をもたらすまちづくり」を『食』という言葉であらわして、創造する。

つまり、『農』の概念を土台として、『食』の概念を付加価値として上乗せする、というこの2点を基本として、

「人・自然・文化が織りなす食と農の都 ～篠山の時代をつくろう～」

という将来像を掲げています。

前頁の将来像を具現化する、まちづくりの基本方向（施策の大綱）としては、次の6点を掲げており、この基本方向に基づいて、さらに15の中目標と41の小目標を設定して、その目標ごとに取り組んでいます。

- (1) 安心して暮らし続けられるまちづくり（分野：健康・福祉）
- (2) 安全で暮らしの環境が整ったまちづくり（分野：都市基盤・防災）
- (3) 心豊かな人を育む子育てしやすいまちづくり（分野：子育て・教育）
- (4) 田園景観や伝統行事の継承と新たな文化を育むまちづくり（分野：環境・景観・歴史文化）
- (5) 活力ある産業を興し、まちの資源を生かすまちづくり（分野：産業振興・農業・観光）
- (6) 市民が主役、市民が主体でつくるまちづくり（分野：参画協働・行政経営）

また、計画の実現に向けては、自治基本条例に規定する「参画と協働によるまちづくり」を掲げています。

2. 取り組みのふりかえり

基本構想に掲げる将来像、まちづくりの基本方向（施策の大綱）に従って、市民生活に関わる様々な分野で取り組みを進めてきました。基本方向に基づく事業ごとの小目標には、各個別の分野で計画を策定して取り組むとともに、成果指標（数値目標）を設定して、毎年度事業ごとに施策評価をしています。

多岐にわたる事業の中で、指標を達成できている事業もあれば、未達成の事業もあり、その中で、事業の拡充や改善、廃止というPDCAサイクルを意識して、推進してきました。

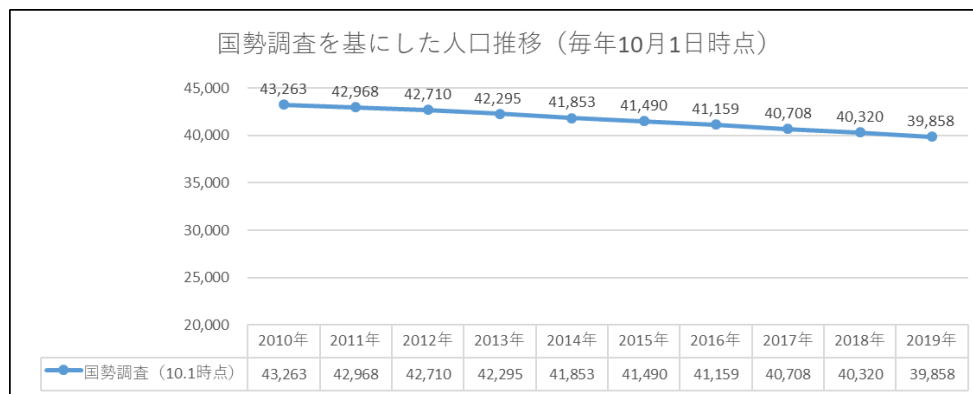
第2次総合計画期間中に取り組んだ主な取り組みは、次のとおりです。

- | | |
|---------|-----------------------------|
| 【定住促進】 | ふるさと丹波篠山に住もう帰ろう運動の推進 |
| 【地域づくり】 | まちづくり協議会への支援、地区まちづくり計画策定推進 |
| 【歴史・文化】 | 日本遺産の認定、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟 |
| 【景観】 | 都市景観大賞受賞、景観まちづくり刷新モデル地区への指定 |
| 【医療・福祉】 | 兵庫医科大学ささやま医療センターの存続に向けた再協定 |
| 【子育て】 | 味間・たき認定こども園の開園、医療費無償化 |
| 【防災】 | 原子力防災の取り組み |
| 【農都創造】 | 農業の担い手づくり、集落営農推進、鳥獣害対策の強化 |
| 【都市基盤】 | 道路、橋りょう等長寿命化、公共交通網の見直し |
| 【財政再建】 | 篠山再生計画の遂行 |
| 【ブランド】 | 丹波篠山市への市名変更 |

3. 人口のふりかえり

第2次総合計画では、10年後（2020年）の人口の見通しを、平成17年（2005年）の国勢調査を踏まえ、40,000人程度と見込み、政策的効果を加味して42,000人に留めることとしていました。

対して、実際は2019年で39,858人と、見込んでいた42,000人を下回る結果となりました。2010年と2019年の間の減少数は3,405人で、1年平均で約380人の人口が減少しています。

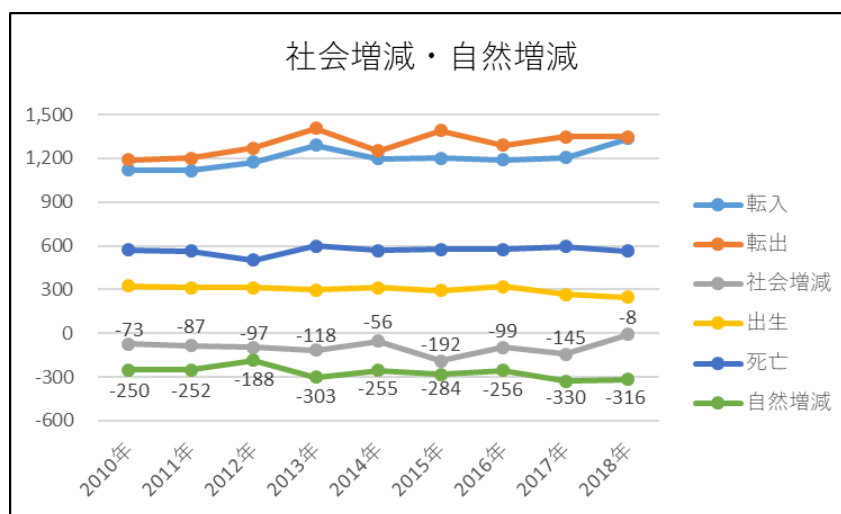


この結果については、日本国全体の傾向（日本全体が人口減少傾向社会に突入しながら、東京一極集中に歯止めがかかっていない状態）、かつ全国の自治体が競争している状態であり、丹波篠山市においても人口減少は例外ではなかった、という結果となっています。特に、消滅可能性都市といわれる、人口が激減する市町村が増えると謳われた、いわゆる増田レポート、さらに平成27年（2015年）、国による地方創生の動き以降、地方の大都市までが人口獲得に向けて動き出したことから、「地方自治体による人口の取り合い」が起こったことが大きな要因であると考えられます。

人口の増減要因には、転入・転出の社会増減、出生・死亡の自然増減の2種類があり、丹波篠山市においては、その双方とも減少が続いています。

そのような中、丹波篠山市では、国が地方創生を提唱する以前の平成23年から「ふるさと丹波篠山に住もう帰ろう運動」を第2次計画のシンボルプロジェクトの一つにも位置付けて展開し、定住人口の維持、拡大に向けて取り組んできました。人口減少が進む現状ではありますが、転出者が転入者を上回る社会減については、近年ある程度抑制されており、「住もう帰ろう運動」の効果の現れと認識しています。

もう一つ、人口増減の大きな要因として、出生・死亡の数が影響します。丹波篠山市では出生数に対し、死亡者は出生数の倍近い、という現象が大きく人口減に影響しました。



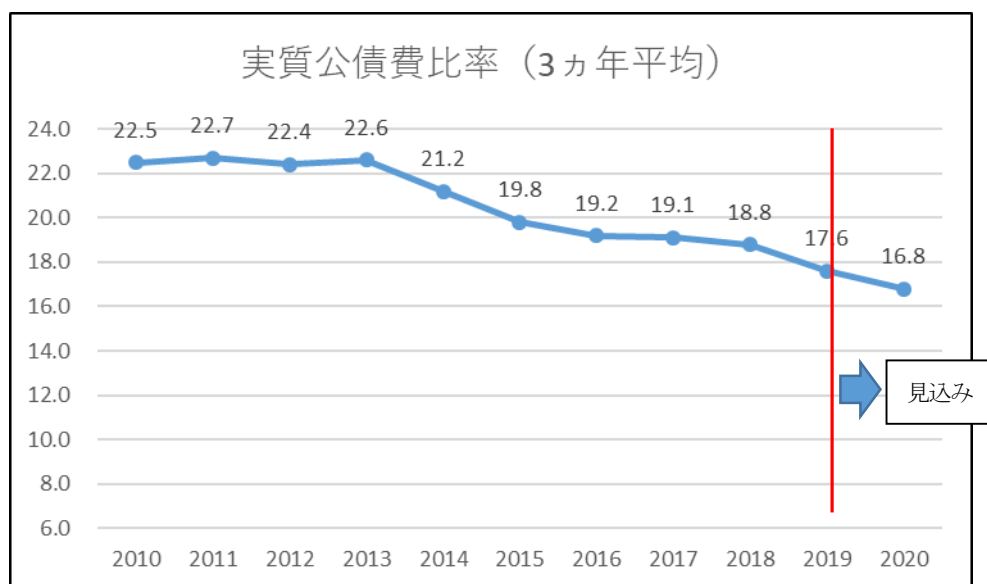
4. 財政のふりかえり

合併以前からの広域課題の解決に向けたさまざまな施策への取り組み、国の三位一体改革による地方交付税の大幅な削減などから、市の財政の収支バランスは崩れ、第2次計画期間がはじまった平成23年度（2011年度）には、深刻な財政状況に陥っていました。

財政状況の改善に向けて、平成20年度（2008年度）に「篠山再生計画―行財政改革編―」を打ち出し、職員定数の適正化や職員給与の引き下げ、公共施設の見直し、各種事務事業の見直しなどを掲げ、計画を推進し、効果額を算定して「再生計画推進委員会」において毎年度検証し、進捗状況を報告してきました。

当初、歳入歳出の収支バランスがとれるのが令和2年度（2020年度）になると見込まれていましたが、取り組みの結果、平成25年度（2013年度）決算の時点で収支バランスは、計画よりも1年前倒しの令和元年度（2019年度）末にとれる見込みとなりました。

自治体の財政状況の指標となる実質公債費比率は、令和元年度（2019年度）末には、起債の発行に際して県の許可が必要な18%を下回り、17.6%まで改善し、令和2年度（2020年度）にはさらに改善が見込める見通しとなっています。



第3章 アンケート、ワークショップから読み取れる市民意識

丹波篠山市の現状について、市民の現状認識と10年後の将来像（あるべき姿）を探るため、アンケート調査と市民ワークショップを実施しました。

1. アンケート

- ・調査対象 : 丹波篠山市内に在住の18歳以上の男女 2,000人
- ・調査方法 : 郵送配布－郵送回収
- ・調査期間 : 令和元年（2019年）9月13日（金）～9月30日（月）
- ・回収状況 :

依頼数	回収数	回収率	有効回収数※	有効回収率
2,000	824	41.2%	817	40.9%

※回収数のうち、白票については無効票として有効回収数には含まない

・調査項目

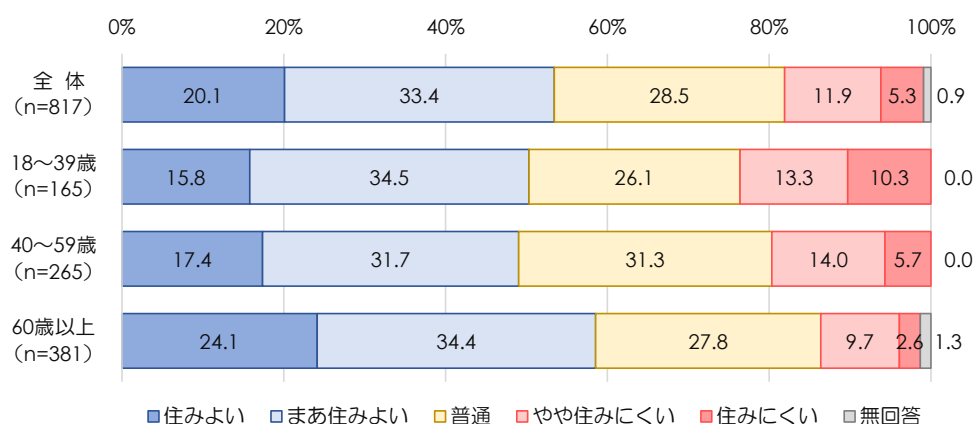
- (1) 回答者属性
- (2) 丹波篠山市での生活環境等について
- (3) 丹波篠山のブランドについて
- (4) 人口問題について
- (5) 市政やまちづくりへの市民参画等について
- (6) 丹波篠山市の施策について

・調査結果（抜粋）

※特筆すべき項目を抜粋して次項から掲載します。すべての調査項目については別途市ホームページで結果を掲載します。

■丹波篠山市での生活環境等について

問：あなたは丹波篠山市を住みよいと思いますか。(〇は1つ)

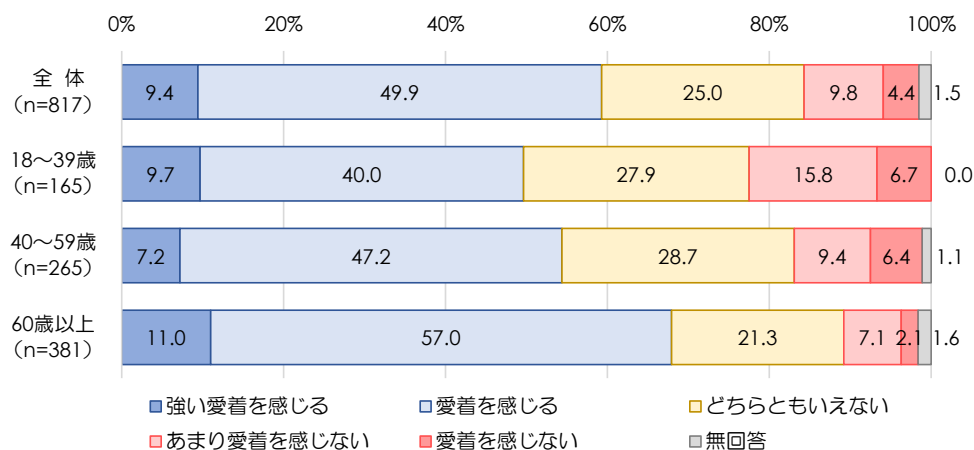


丹波篠山市について「まあ住みよい」が33.4%と3割を超えて最も多く、「住みよい」(20.1%)と合わせると、半数以上が『住みよい』と感じています。

年代別にみると、60歳以上で『住みよい』が6割近くを占めているのに対し、18～39歳・40～59歳では半数程度となっており、『住みにくい』(「やや住みにくい」と「住みにくい」を合わせた割合)が2割程度を占めています。

■丹波篠山市への愛着

問：あなたは丹波篠山市やお住まいの地区などの身近な範囲に、日頃どのぐらい愛着を感じていますか。(それぞれに〇は1つずつ)

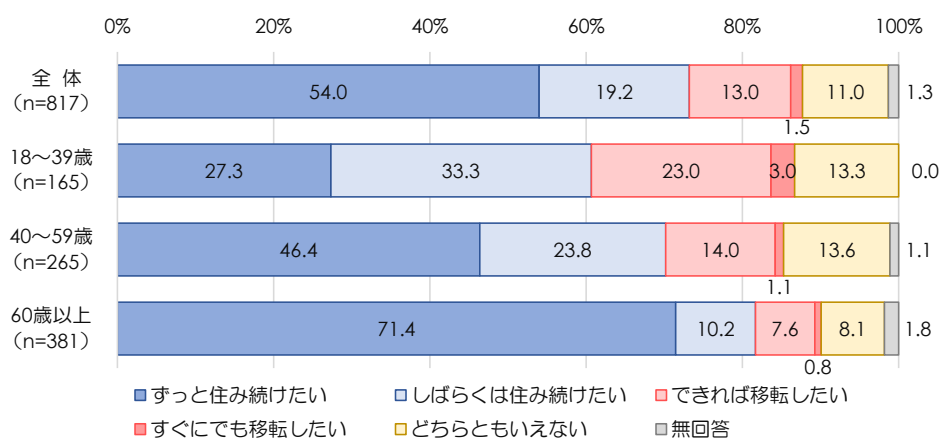


丹波篠山市への日頃の愛着では、「愛着を感じる」が49.9%と約半数を占めて最も高く、「強い愛着を感じる」(9.4%)と合わせると約6割が『愛着を感じる』と回答しています。

年代別にみると、60歳以上で『愛着を感じる』が7割近くを占めているのに対し、18～39歳・40～59歳では半数程度となっている。また、『愛着を感じない』(「あまり愛着を感じない」と「愛着を感じない」を合わせた割合)が2割程度を占め、特に18～39歳では2割を超えて高くなっています。

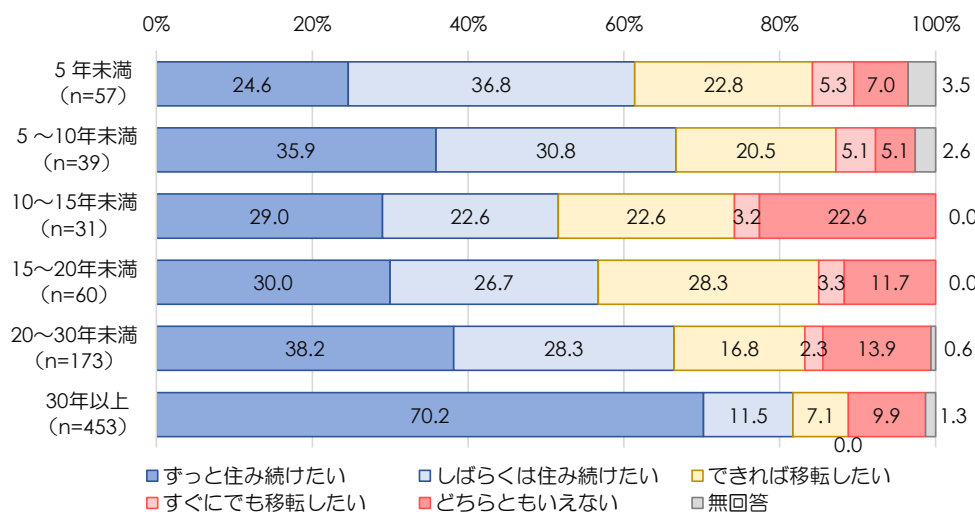
■丹波篠山市での今後の居住意向

問：あなたは、今後も丹波篠山市に住み続けたいと思いますか。(○は1つ)



丹波篠山市での今後の居住意向では、「ずっと住み続けたい」が54.0%と半数を超えて最も多く、「しばらくは住み続けたい」(19.2%)と合わせると、7割以上が『住み続けたい』と考えています。

年代別にみると、60歳以上で『住み続けたい』が8割以上を占めているのに対し、18～39歳では6割程度となっており、『移転したい』(「できれば移転したい」と「すぐにでも移転したい」を合わせた割合)が2割以上を占めています。

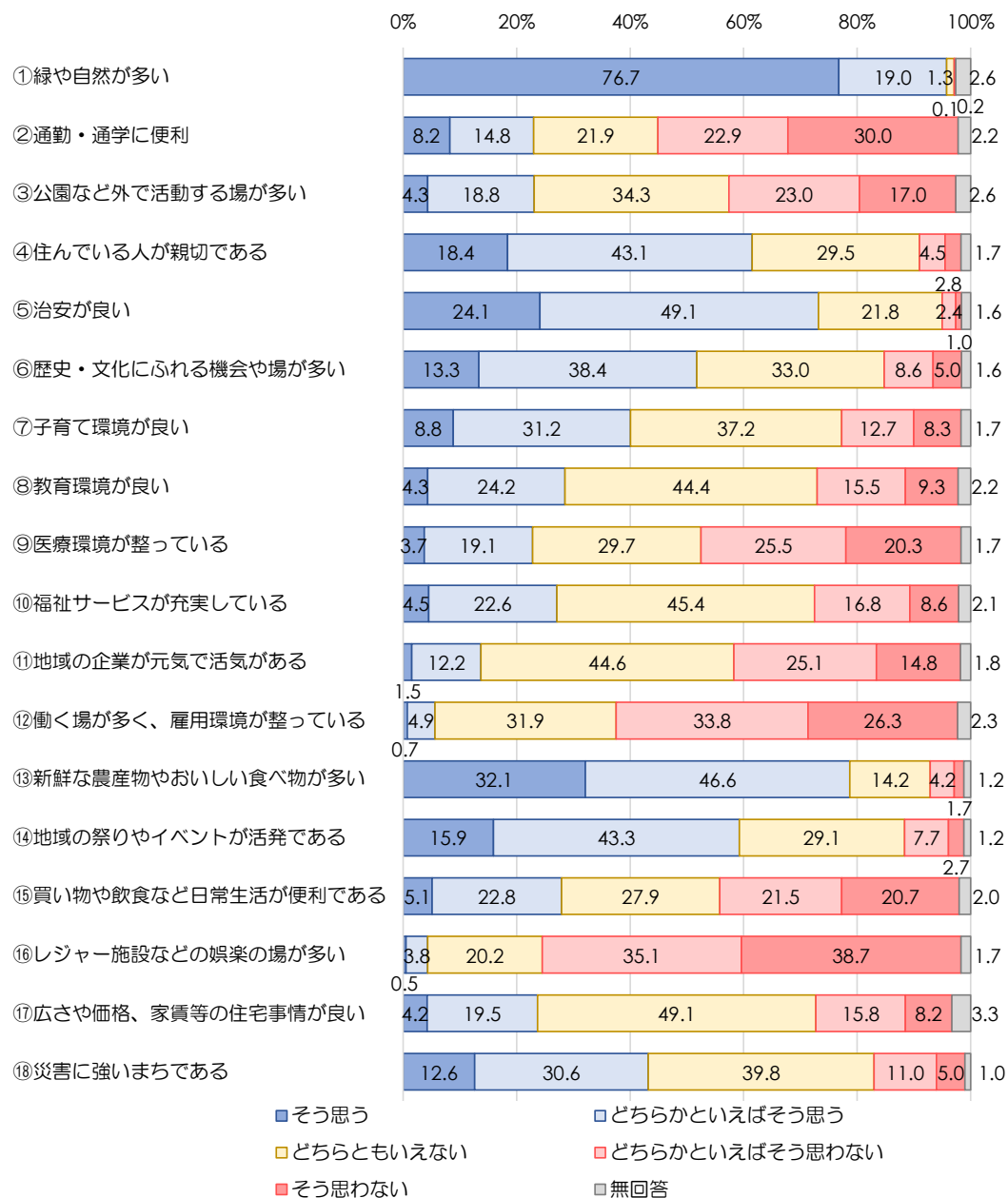


丹波篠山市への居住年数別にみると、『住み続けたい』が30年以上で8割を超えて最も高く、次いで5～10年未満・20～30年未満で6割以上を占めています。

一方で、『移転したい』では、10～15年未満で2割を超えて最も高く、その他の居住年数に比べてやや高くなっています。

■丹波篠山市の特徴（評価）

問：丹波篠山市はどのような特徴のあるまちだと思いますか。次のそれぞれの項目について、お答えください。（それぞれに○は1つずつ）

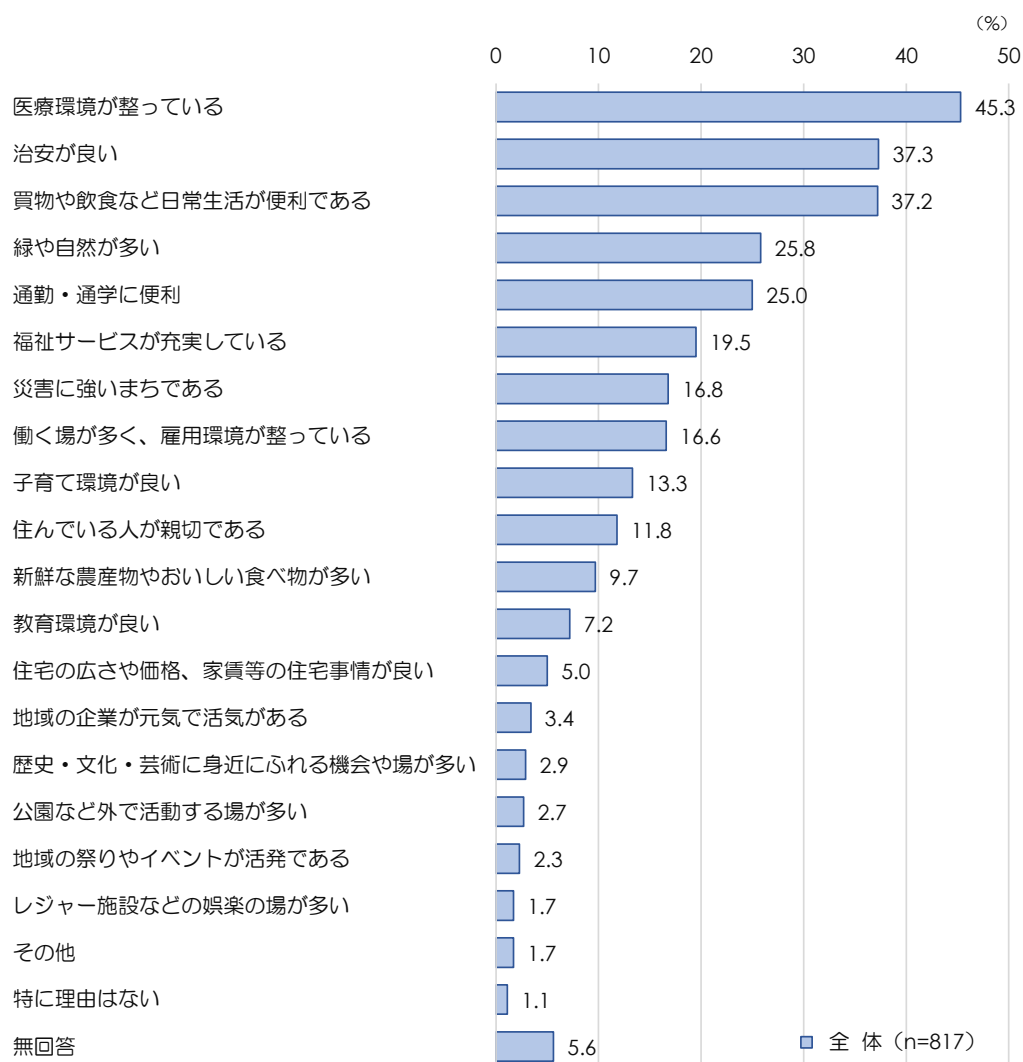


特徴・評価については、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた割合をみると、「①緑や自然が多い」で95.7%と最も高く、次いで「⑬新鮮な農産物やおいしい食べ物が多い」が78.7%、「⑤治安が良い」が73.2%の順となっています。

一方で、「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」を合わせた割合をみると、「⑯レジャー施設などの娯楽の場が多い」が73.8%と最も高く、次いで「⑫働く場が多く、雇用環境が整っている」が60.1%、「②通勤・通学に便利」が52.9%の順となっています。

■居住環境として重要と考える項目

問：あなたが、居住環境として重要と考える項目は何ですか。（〇は3つまで）

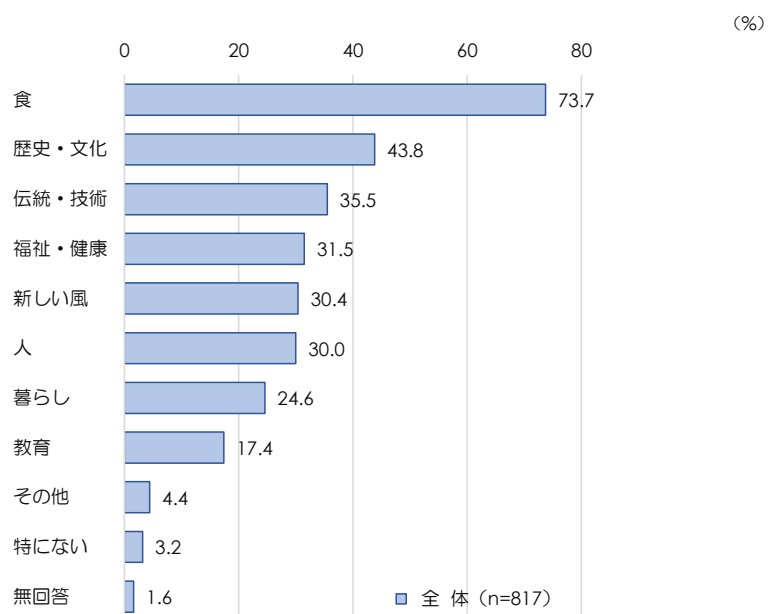


居住環境として重要と考える項目では、「医療環境が整っている」が45.3%と最も高く、次いで「治安が良い」(37.3%)、「買物や飲食など日常生活が便利である」(37.2%)、「緑や自然が多い」(25.8%)、「通勤・通学に便利」(25.0%)の順となっています。

前項目の丹波篠山市の特徴・評価結果と比較すると、重要と考えられている上位項目のうち、丹波篠山市では治安の良さ、緑や自然が多い、災害に強いまち、などでは評価が高くなっているものの、その他の項目では低い評価となっています。

■丹波篠山市の魅力を発信していく際の資源

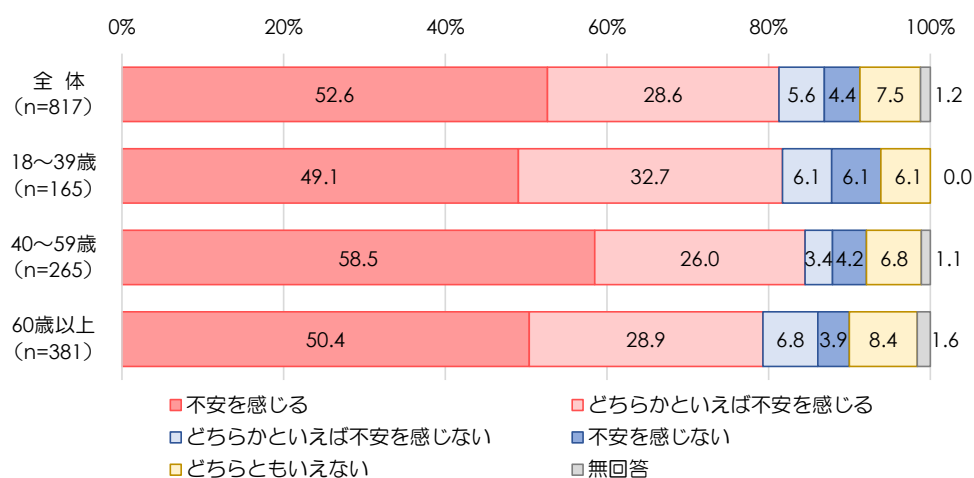
問：今後、丹波篠山市の魅力を発信していく際の資源は何だと思いますか。(〇はいくつでも)



丹波篠山市の魅力を今後発信していく際の資源では、「食」が73.7%と最も高く、他の項目と比べても突出して高くなっています。次いで、「歴史・文化」(43.8%)、「伝統・技術」(35.5%)、「福祉・健康」(31.5%)、「新しい風」(30.4%)、「人」(30.0%)の順となっています。

■人口減少の進行に対する不安

問：あなたは、今後、人口減少が進んだ場合、将来に不安を感じますか。

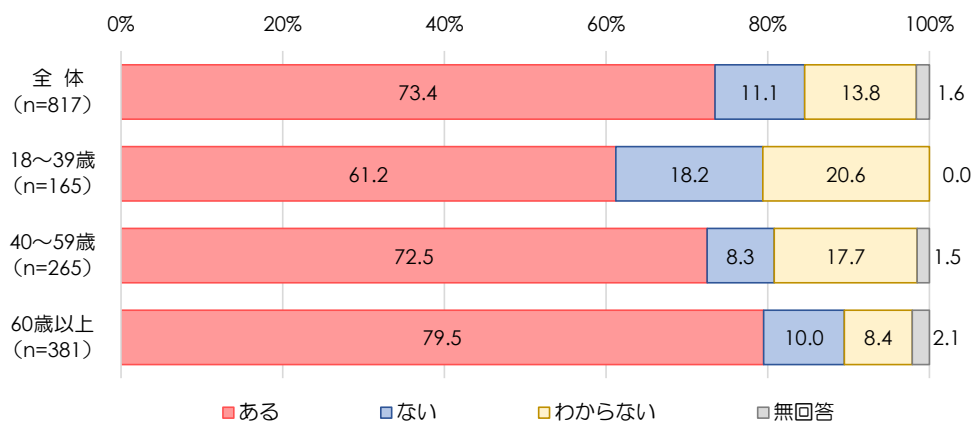


人口減少が進んだ場合の将来への不安では、「不安を感じる」が52.6%と半数を超えて最も多く、「どちらかといえば不安を感じる」(28.6%)と合わせると、8割以上が『不安を感じる』と回答しています。

年代別にみると、40～59歳で『不安を感じる』が最も高くなっているものの、すべての年代で8割前後となっており、年代による大きな差は見られません。

■人口減少の実感の有無とその内容

問：あなたは、日常生活の中で「人口が減っている」と実感することはありますか。

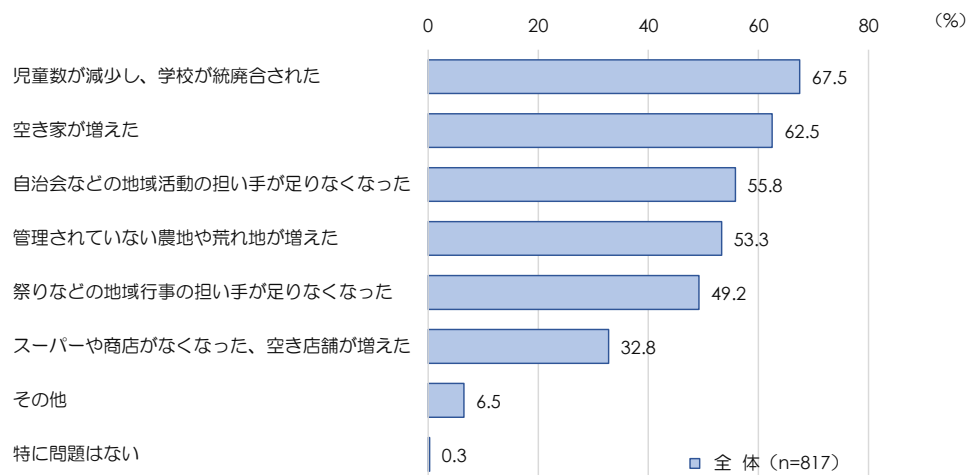


日常生活の中で人口が減っていると実感することでは、「ある」が73.4%と大半を占め、「ない」が11.1%となっています。

年代別にみると、概ね年代が高くなるにつれて「ある」が高くなっており、18～39歳では約6割となっているのに対し、60歳以上では約8割を占めています。

■人口減少により身の回りで発生している問題

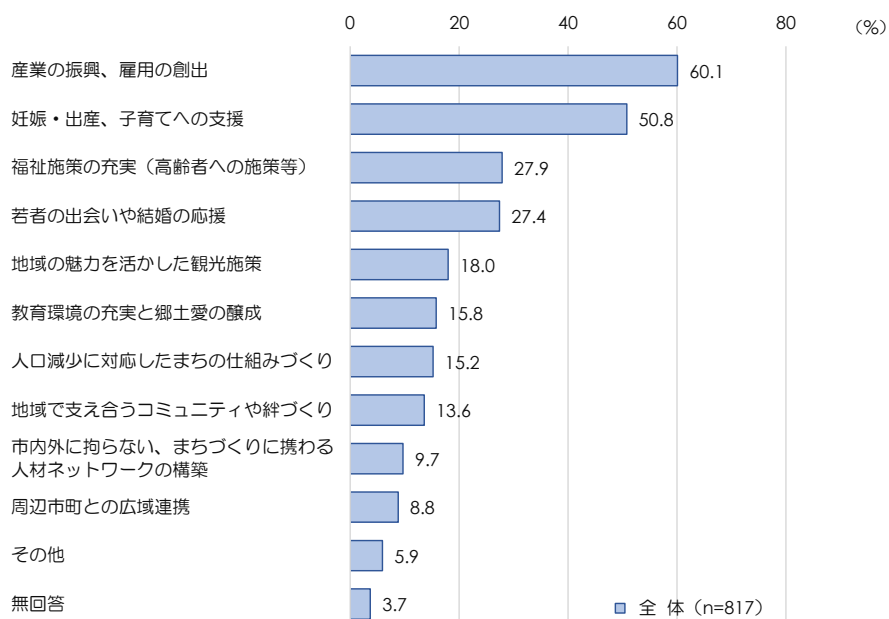
問：【前項目で「ある」と回答した方に】人口が減ったことであなたの身の回りにどのような問題が発生していますか。(〇はいくつでも)



人口減少により身の回りで発生している問題では、「児童数が減少し、学校が統廃合された」が67.5%と最も高く、次いで「空き家が増えた」(62.5%)、「自治会などの地域活動の担い手が足りなくなった」(55.8%)、「管理されていない農地や荒地が増えた」(53.3%)の順となっています。

■人口減少に対処するために力を入れるべきだと思う取り組み

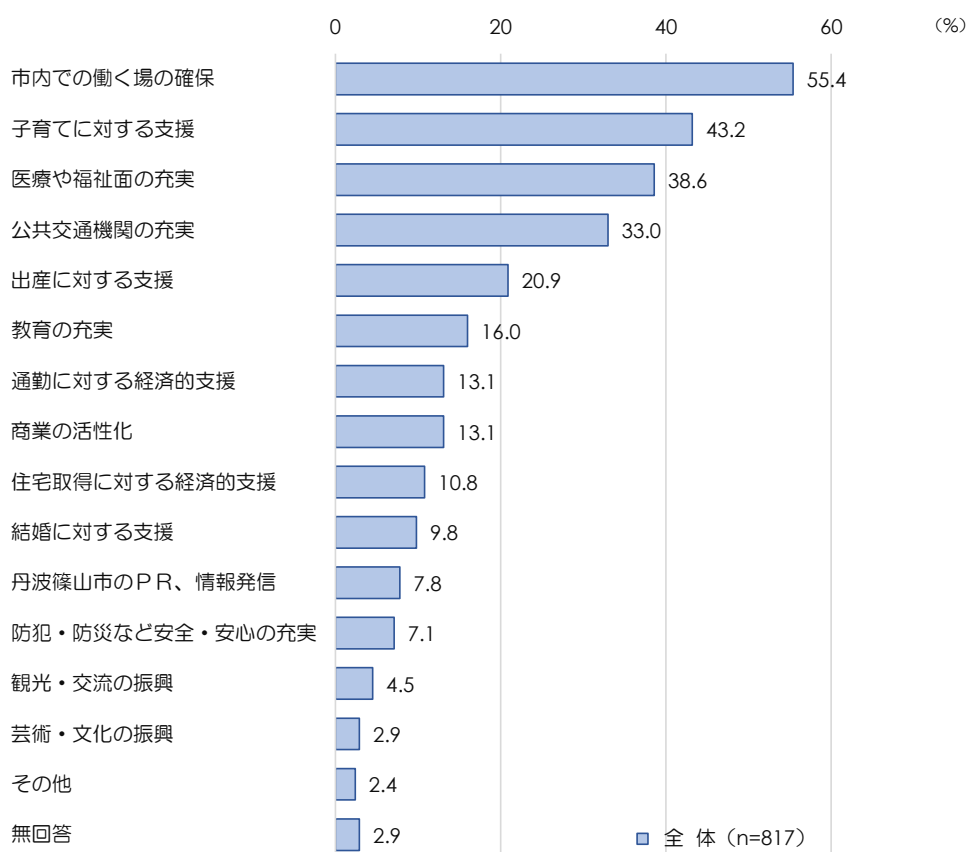
問：人口減少に対処するために、丹波篠山市ではどのような取り組みに力を入れるべきだと思いますか。(〇は3つまで)



人口減少に対処するために、力を入れるべきだと思う取り組みでは、「産業の振興、雇用の創出」が60.1%と最も高く、次いで「妊娠・出産、子育ての支援」(50.8%)、「福祉施策の充実(高齢者への施策等)」(27.9%)、「若者の出会いや結婚の応援」(27.4%)の順となっています。

■若い世代が丹波篠山市に住み続けるために力を入れるべきだと思う取り組み

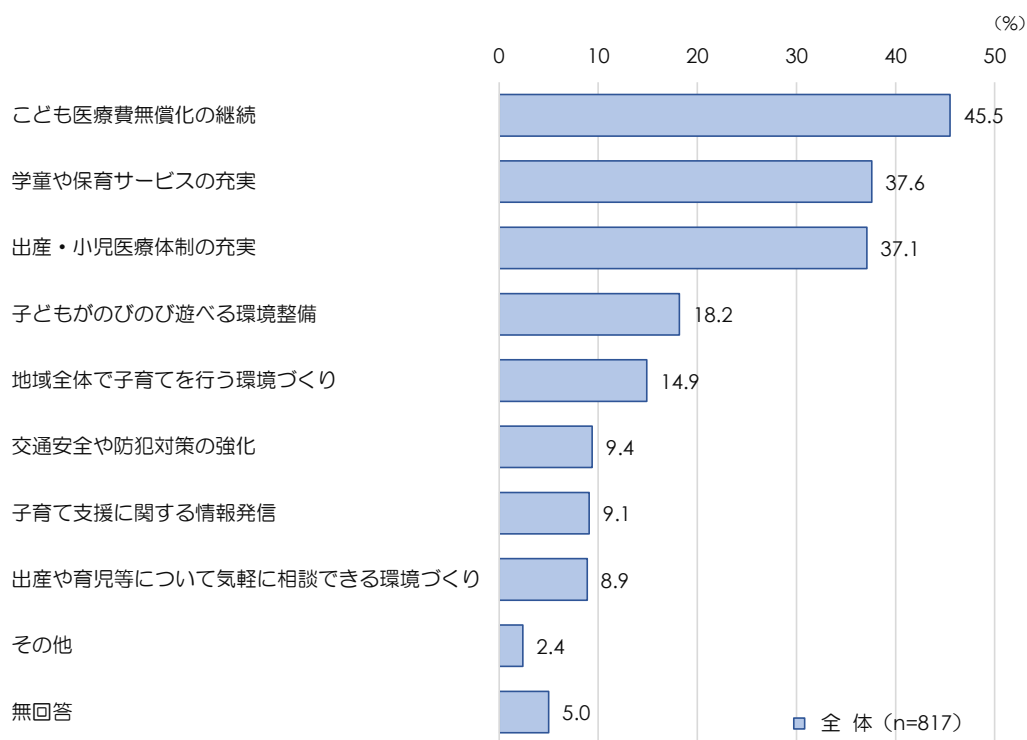
問：今後、若い世代が丹波篠山市に定住(住み続ける)していくためには、どのような施策に力を入れていく必要があると考えますか。(〇は3つまで)



若い世代が定住(住み続ける)していくために力を入れていくべき施策では、「市内での働く場の確保」が55.4%と最も高く、次いで「子育てに対する支援」(43.2%)、「医療や福祉面の充実」(38.6%)、「公共交通機関の充実」(33.0%)の順となっています。

■子育て支援策として重要だと思う施策

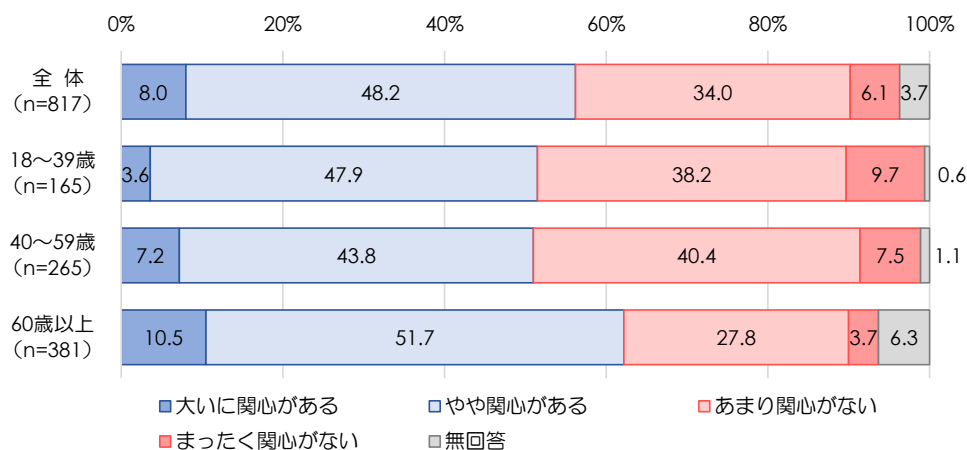
問：子育て支援策としてどのような施策が重要だと思いますか。(○は2つまで)



子育て支援策として重要な施策では、「こども医療費無償化の継続」が45.5%と4割以上を占めて最も高く、次いで「学童や保育サービスの充実」(37.6%)、「出産・小児医療体制の充実」(37.1%)の順となっています。

■市民参加のまちづくり活動への関心

問：あなたは、市民参加のまちづくり活動に関心がありますか。(○は1つ)



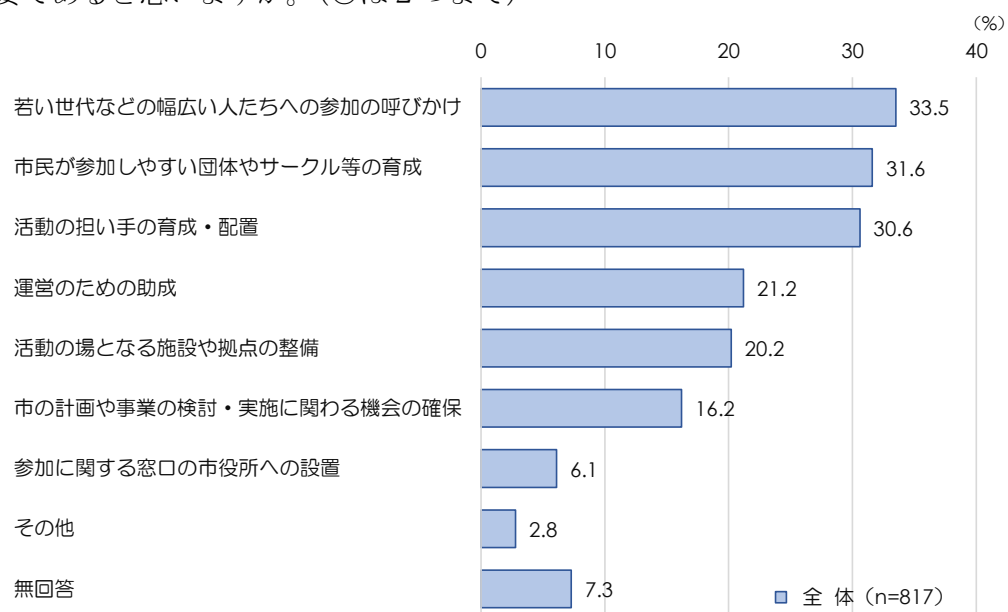
市民参加のまちづくり活動への関心度では、「やや関心がある」が48.2%と半数近くを占めて最も高く、「大いに関心がある」(8.0%)と合わせると6割近くが『関心がある』と回

答している。一方で、『関心がない』（「あまり関心がない」と「まったく関心がない」を合わせた割合）が約4割を占めています。

年代別にみると、60歳以上で『関心がある』が6割を超えて高くなっているのに対し、18～39歳・40～59歳では半数程度となっている。また、18～39歳・40～59歳では『関心がない』が半数近くを占めています。

■ 市政やまちづくりに市民の参加を進めていくために重要であると思う施策

問：市政やまちづくりにおいて市民の参加を進めていくために、どのような対策が重要であると思いますか。（○は2つまで）

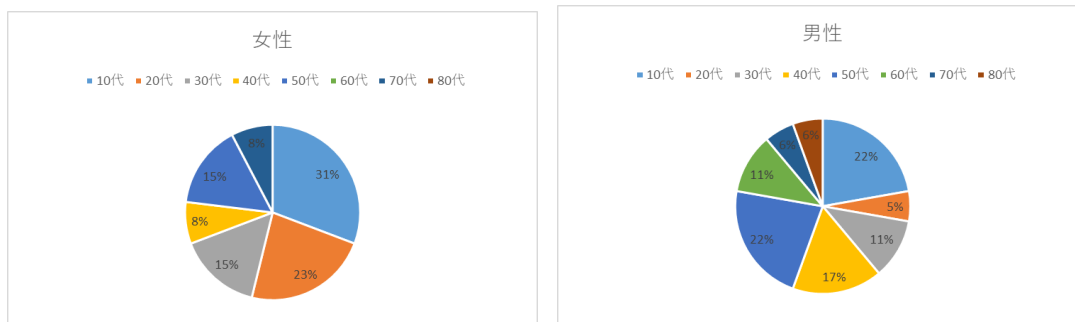


市政やまちづくりにおいて市民の参加を進めていくために重要な対策では、「若い世代などの幅広いひとたちへの参加の呼びかけ」が33.5%と最も高く、次いで「市民が参加しやすい団体やサークル等の育成」(31.6%)、「活動の担い手の育成・配慮」(30.6%)の順となっています。

2. ワークショップ

※令和元年10月5日（土）、10月11日（金）に計3回実施）

参加者：10代から80代の男女計31人（計6グループに分かれて）



・結果概要

各グループから出てきた意見から、共通するキーワードを整理しました。

豊かな環境・豊富な地場産品

すべてのグループにおいて、環境や食べ物などの項目では良い点や魅力としての意見が多く挙がりました。環境面では、自然が豊かであることや歴史のある街並み・建物の存続、空気がきれいなどの意見、地場産品では、黒豆・枝豆・丹波栗・ぼたんなべ・ブルーベリーなどの地場産品が豊富であり、丹波篠山のブランドとなっているとの意見がありました。

一方で、その豊富な資源をうまく活用ができていないのではないかとといった意見もあり、市内外へのPRを含めた丹波篠山ブランドや住みやすい環境についての周知が必要です。

観光促進と住民生活の共存

デカンショ祭りやABCマラソンなどの大きなイベントなどの効果もあり、秋～冬の週末などでの観光客が増加しており、賑わいがあるなどの意見が多く挙がりました。

一方で、その影響による通行止めや観光バスの出入りによる居住者の生活への影響が出ているとの意見もありました。観光客や交流のメリットや市への効果を広報するなど、市民を含めた市全体での観光促進に向けた意識づくりが必要です。

空き家の活用

子どもを含めた人口減少により、空き家や空き商店などが増加しているとの意見がありました。一方で、転入者や起業にチャレンジする人も多くいることから、そのマッチングがうまくできれば活用できるのではないかとといった意見もあり、利用したい人と利用してほしい人がつながる仕組みづくりが必要です。

子育て・教育環境の改善

子どもの減少対策として、子育て・教育環境の改善を求める意見が多く挙がりました。具体的には、妊娠・出産期を支える医療機関の充実、子育て期を支える公園や交流の場の充実、教育期を支える通学のための交通手段の充実といった意見がありました。

切れ目のない子育て支援を行うことで、出生の増加を図っていく必要があります。

まちづくりへの参加の促進

今回のワークショップでは、中学生・高校生をはじめ、若い年齢層の参加が多くあり、まちづくりへの関心の高さがうかがえました。

若者自身が丹波篠山市の未来について考え、意見を出し、それが市の今後の姿に反映させることができるということを周知・広報することで、次世代の担い手としての育成が図られると考えます。今後も、会議やワークショップなどへの若者の積極的な参加を促進していく必要があります。

これらを総括して、グループ（計6グループ）ごとに“めざすまちの将来像”として掲げられたものは次のとおりで、策定議論の参考にしました。

- ・若い人がまちづくりに参画できるまち
- ・人情あふれる丹波篠山に人口減少の歯止めを
- ・安心・安全でみんなが笑顔になれる街
- ・すべてを受け入れるマチ 丹波篠山
- ・人と自然が共存するまち
- ・野心的・戦略的な施策で資源が好循環するまち